
尾耳様な日常

粕井菜緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

尾耳様な日常

【Nコード】

N1106Z

【作者名】

狛井菜緒

【あらすじ】

両親の離婚により田舎の祖父母に引き取られた平凡な万穂。尾守様と呼ばれる神社に、引っ越しの挨拶にいった翌日、頭と尻からあり得ないものがはえていた。

祖母に聴くと万穂は「尾耳様」に選ばれたのだと言う。

神様を巻き込んだスローライフラブコメディ

さらば都会（前書き）

中編の予定です

多分15ぐらいで終わるといいな…

さらば都会

私の両親は私をいらないといった。

「かず…もうすぐつくぞうー…」

「へーい。」

私の名前は清原万穂
万の穂と書いてカズホと読む

生まれも育ちも東京の私は現在、人生の転換期を迎えていた。

恥ずかしい話だが、私は容姿も平凡、成績も中。とくに目立つ素養もない。唯一自慢できるとしたら自炊で鍛えた料理の腕ぐらいだろう。

どうやらそんな私は両親からしたら出来損ないな娘らしい。

私の家族は私を含めて5人家族。私は長女で、下に小学生と中学生の弟達がいる。まー、その弟達がずば抜けて良くできる子だったから姉ちゃんとしては肩身が狭かったわけだ…。

まさか、要らないなどと両親に面と向かって言われるとはショックなわけでした…あー…端的に言いますと家の両親離婚したんです。ついでさっき。

優秀な弟達は無事両親のいずれかに引き取られたんですが、私の事に関しては何も受け取り拒否りまして裁判で親権放棄しちゃったんです。

…それを聞いた父方の祖父ちゃんが激怒。親父に縁切り状を叩きつけると、家なき子な私を引き取りにきてくれました。

白い軽トラックで。

素敵でしょ？高速とかガタガタ揺れて腰が痛かったけどね。

手には服やその他諸々を詰め込んだ赤いボストンバックだけで、着ている服は先ほど転校届け出してきた高校の制服。

この制服を着るために受験頑張ったけど、僅か4ヶ月でその努力もパアになってしまった。

私の燻し銀な祖父ちゃんは清原茂樹（72）と癒し系祖母の花子（70）は尾守村という田舎で百姓をしている。

尾守村は町から自転車で一時間半ぐらい離れた山間の村で、人口は200人

村の若い衆はほとんど町に働きに出ているのでジジばばばかりらしい。

あ、じいちゃんちの隣の粕屋さんちの同い年の男の子とがひとりと、後は小さな子供ばかりらしいがそれを聞いて、ちょっとほっとする。

え？だってほら同じ歳の奴とか若いのがいるのってだけで安心するじゃん

性別はさておき、高校も多分一緒に通う事になるだろし、流石にじーちゃんバーちゃんだらけの村で忌憚なく話せる年代って貴重じゃん。

ま、それはさておき。東京から五時間かけて到着しました。

相変わらず無駄に広い家だ。床と玄関との段差があるあたり、流石雪国って感じで屋根も傾斜がついたトタン屋根。

冬になると完全に陸の孤島になるこの村が私の居場所となる。

新鮮な空気を吸い込むと、私は荷物をもって部屋へと案内された。

私の部屋は親父の妹で嫁にいった叔母さんの使っていた部屋で所々可愛らしい雰囲気がある部屋だった。

茜色のカーテンとオレンジ系統で統一された明るめな部屋は、私の気持ちをやや浮上させてくれた。

「おかえり、カズちゃん。」

出迎えてくれた優しい祖母ちゃん言葉につっかかり泣きそうになっ
てしまった。

おかえりなんて言ってくれる人がいるのだと言う安心感と同時に、
無くしてしまった家族を思うとちよっぴり切なくなってしまった。

近所に軽く挨拶をすませると、じいちゃんが尾守様のとこにいけっ
て言い出した。

おまもり様とは、尾守村の山の方にある尾守神社のことだ。古くからある稲荷神社で、鎌倉時代ぐらいからあるらしい。

一、二回 お参りに行ったけど階段が半端なくて、マジ疲れるんだよね…

まあ、これからお世話になるわけだし？

挨拶はしとこうと、五円玉をひっさげ、神社の入口まできてみた。赤い鳥居が石造りの灯籠とかやけに雰囲気がある。階段を見上げると杉林が参道を暗くさせて、ちよっと出そうな雰囲気です。

夜には絶対きたくないな。

息を切らせてと階段を上がると、閑散とした社がそこにはあった。

まず、お水で手を清めてからお参りせるんだっけ？

湧水で手を洗うとお賽銭箱へと向かう

神社を守るかのように参道の両脇に鎮座した二匹の狐の神使を通り過ぎて、お賽銭箱に五円を投入して、パンパンと二回手を叩いた。

(今日から越してきたんで、よろしくお願いします。)

適当に脳内で挨拶をすませて、いざ帰ろうと振り返った瞬間ポスッと何か壁に顔をぶつけた。

「……。」

「え?」

顔を恐る恐る見上げるとどえりゃー美形さんがいらっしやいました。なんつーの? 掃き溜めに鶴みたいな感じで何か浮いた外人美形さんだった。

私と同じ年ぐらいの男の子で、158cmの私の頭が胸に埋まる背が高い。

更々とした金髪に、白い肌、薔薇色のほっぺたに薄い唇。涼しげな琥珀色の瞳は淡々と私を見下ろしていた。

美形さんは何故だか水色の袴に白い着物…どうみても神主のコスプレ姿をしており、私の混乱は余計にひどくなる一方だ。

「ど、どちらさんで?」

「……ん。」

淡い笑みを浮かべると、何故か美形さんは私の頭をよしよしと撫でて、私を抱き寄せギューと抱きしめる。

わけが分からず首を傾げていたら、美形さんは身体を離し私の頭を再び撫でると、満足そうにふわふわとどっかに行ってしまった。

なんとも不思議さんな美形でした。どさくさに紛れて抱きつかれたのは、これはこれで役得というか、ご利益があったようです。

パネえっすよ尾守さま！

そんな感じで家にかえると、近所の人たちからおかずやお菓子を頂き、豪勢な夕食をじいちゃん達と食べていると、あの美形さんが気になってじいちゃんに聞いてみた。

「ねー、じいちゃん。」

「ん？なんだ」

「身長が180ぐらいあって、私と同じ歳ぐらいの金髪の神主さんっている？」「隣の家の耀ちゃんじゃな。けどさっき会ったばかりじゃが、金髪に染めてなかったぞい？」

「耀ちゃん？」

「粕屋耀一。ほれ、さっき言っておった同い年の粕屋の次男坊じやよ。粕屋家は尾守神社の宮司もしているから、神主の格好をした同い年ぐらいの男子というのは耀ちゃんしかおらん」

どうやら、あの金髪美形さんは粕屋耀一というらしい。

なんでも、忙しい両親のかわりにたまに神社の掃除をしに行ってい

るんだとか。

ほー…偉いな。

だが、先ほどのじいちゃんの話に何か引っかかる。

耀一君とやらは髪を染めていない…つまり、黒髪って事でしょ？もしかしてカツラ…って訳でもなさそうだ。

もしかして観光客？いやいやコスプレした観光客なんていないからぐるぐると考えてみたが纏まらず、その日はそれ以上あの美形さんの事は考えるのをやめて寝た。

しかし、翌朝、金髪美形のことや両親のことが頭から吹っ飛んでしまった。

朝おきて洗面台のをみて叫び声をあげた私は、人間として正しいリアクションをしたとおもう。

そう、私の頭には人間としてあってはならないものが生えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1106z/>

尾耳様な日常

2011年12月4日02時50分発行